

令和2年度 第1回南信州民俗芸能継承推進委員会 会議録

日時：令和2年5月27日（水）10:30～12:00

場所：南信州広域連合事務センター201・202 会議室

出席者：別紙のとおり

1 協議事項

協議事項は全て承認された。

2 意見交換

テーマ：今後の事業推進について

<國學院大學 小川教授>

今後の事業推進については、次の5つのことがポイントになると考えている。

1つ目は、魅力発信の基盤をどう作るか。そのためには、地域の文化を学術的にしっかり担保しておくことが必要である。上辺だけを捉えるのではなく、本質的にどういう意味があるのかしっかり把握しておくことが、その基盤づくりに繋がるのだと思う。

2つ目は、「南信州民俗芸能パートナー企業制度」の実質化をどう展開していくか。この制度は全国へ波及する可能性を持っている制度だと思う。企業、民間、行政が民俗芸能のような地域文化を核にした地域振興を行うモデル例を積み上げている。

3つ目は、民俗芸能団体がどれだけ横の連携を作れるか。芸能の種類が違い、抱えている問題も一律ではないので難しいが、考えなければいけない課題である。

4つ目は、若い人たちのモチベーションをどのように上げていくか。國學院大學でやっていただいているような公開の場を作ることだとか、文化財への指定だとか、記録選択だとか、そういうことがモチベーションを上げていくことだと思う。

5つ目は、この事業全体と関係人口の関わりをどう考えるのか。地域出身者や、縁故者、南信州のファン、芸能マニア、観光客、伝統野菜の定期購入者など、民俗芸能の周りにあるものとの関係性をどう構築していくかが大事だと思う。

現在新野で進められている山村留学制度はバックアップしていかなければいけない制度だと思う。山村留学はいろいろなところで始められている。宮崎県西都市の銀鏡（しろみ）神楽という芸能がある地域では、銀上（しろがみ）学園という小中一貫校を作り学校を維持し、神楽も維持しているが、小学校の児童16人のうち、13人は山村留学の児童である。関係人口とどういう関係を作っていくかということを検討するといいたいと思う。

地方創生の補助金で芸能ができるようになった。クラウドファンディングや企業版ふるさと納税をどう活用するのも今後の課題となると思う。

<東京福祉大学 宮田特任准教授>

今まで9つの方向性で、それぞれ成果を挙げてこられたと思う。方向性2や6にある地

域外での発表機会の提供や地区外人材の受け入れについては、今年は厳しい状況である。コロナウイルスは、一度は収束したが、今までのような交流は、少なくとも今年から来年は難しい。今年来年、それを休止した場合、今まで盛り上がったことが急速に萎んでしまわないか、萎まないための方策を協議会で考えていかなければいけないのではないかと思う。1つはウェブ配信を積極的にやるということだと思し、他に若い人たちからのアイデアを募ることも必要。観光ツアーも今年は昨年度までのように継続することは難しい。そういうことを危惧している。

<長野県立歴史館 笹本館長>

コロナの問題は社会全体、歴史全体を変えるような大きな出来事である。地域のお祭りは大きなお祭りだけではなく、小さなお祭りも次々に中止されていて、これが相当の長期間続くと思われる。社会が大きく変わり、人の繋がりが分断されていく中で、私たちはどういう行動をとっていくかが課題である。お祭りには3密の要素全てがそろっている。やる人、見る人、繋ぐ人それぞれについてどうすべきなのか考えてみたい。

<黒田人形保存会 高田相談役>

今まで芸能団体だけではできなかったことをこの協議会ではできており、ありがたく思っている。

<新野雪祭り保存会 勝野会長>

コロナの対応としては、今の段階ではまだ具体的にはなっていないが、今年については外部には広げないで、住民の親交のみという形でやっていきたいと考えている。

<南信濃遠山霜月祭保存会 針間会長>

狭いところに大勢の人を入れて行う行事は難しい。神事のみをやるのか、舞までおこなえるのか危惧している。

<飯田市教育委員会生涯学習・スポーツ課 馬場文化担当課長>

子どもたちが霜月祭りに参加したりしているが、今年は積極的に参加していただけるかどうかかわからないし、学校行事も苦勞されている状況もある。ウェブを使って発信するなど新しい取り組みも必要だと思う。

<南信州地域振興局リニア活用・企画振興課 神田課長>

コロナウイルスの影響は民俗芸能に限らず、いろいろなところに出ており、横断的課題と捉えている。このまま何もしないのでは、令和2年度は何もできなかったということになりかねない。神事部分だけでも続けるということもあるかもしれないし、こういう時だからこそ、将来に向かって何かできることをやる年度にするということは一つの考え方としてあると思う。「推進すべき9つの方向性」の実行度の検証をすることで、いろいろな課題が見えてくるのではないかと思っている。ぜひいろいろな団体の参加で、未来に向かって新しい何かを考えていきたい。

<長野県立歴史館 笹本館長>

地域の人たちだけではやりきれないお祭りもたくさんある。企業の協賛というような

資金的な課題はどうかなど、演じる側にどういう問題があるのか知りたい。今後お祭りをどうしていくか、今年が大きなステップになる。具体的な状況を知りたい。坂部の冬まつりはどうか。

<天龍村教育委員会 竹田教育長>

坂部の冬まつりは、今の段階では、今までどおりのお祭りの実施は難しいと思っている。地域の人たちもコロナウイルスに対して危機感を全く持っていないということは無い。外部から人が来るということになれば、それなりの対応を取らなければならない。お祭りでは3密を回避することは非常に難しい。どこまでが可能なのか考えて対応せざるを得ないと思う。

<大鹿村教育委員会 北村事務局長>

大鹿歌舞伎の定期公演は、不特定多数の方約1,000人が来られるが、そのうちの半数は県外からのお客さんである。大鹿歌舞伎の春の定期公演はできなかった。しかし、継承は継続をしなければいけないと思っている。大鹿中学校では40年以上大鹿歌舞伎に取り組んでいて、毎年秋に発表をしているが、その稽古はすでに始まっていて、一生懸命取り組んでいるので、発表の形は考えなければいけない。小学校でも毎年4年生が3月に発表会をしておりその発表会も中止になったが、数カ月の稽古の成果は、お客さんを入れずに発表をした。従来どおりの形ではできないが、若者たちへの継承は止めてはいけないと考えている。春の連休は村のケーブルテレビで過去の大鹿歌舞伎の公演の動画をずっと奉呈していた。自分たちの芸能を見直す機会となった。

<事務局>

今後、コロナ対応も含め、芸能団体の課題など話を聞かせてもらい、今後の事業推進を検討していきたいと考えている。